



長女の医療事故をきっかけに、より良い医療の実現を目指し市民活動を続けている勝村久司さん(左)。大事なのは、医療を専門家に任せずに市民が主体的にチェックすること、それを可能にする情報公開だ。現役の高校教諭でもある勝村さんが見つめる先にあるのは、民主主義だ。(石原真樹)

九月、薬害防止のための第三者組織ができました。厚生労働省に新たに設置された「医薬品等行政評価・監視委員会」はひとこと

で言うと、市民感覚でおかしいことはおかしいと忖度なく言える委員会です。血液製剤「フィブリノゲン」を投与された患者がC型肝炎に感染させられた薬害肝炎事件を検証した二〇一〇年の報告書に、再発防止のため第三者性のある機関が必要だと盛り込まれ、十年かかって実現しました。厚生労働省に都合の良い専門家ばかり選ばないよう、委員を選ぶための選考委員会まで作ったのは画期的。その選考委員を務めました。期待される役割は。

たとえは新型コロナウイルス感染症で、抗インフルエンザ薬「アビガン」がコロナに効くかや副作用がないかがよく分かっていない段階で、安倍晋三首相が備蓄拡大を表明するなど、ワクチンや治療薬がきちんと審査されないうちに政治家が勝手に発言するのはすごく危険。薬は、ひとつ間違えたらウイルス以上に怖いものになるといって薬害の歴史が忘れられている。国が製薬企業にいくら税金を使うのかわかっているか。なせ米国内で回収されていた血液製剤が日本で使われ、薬害エイズ被害が起きたのか。薬害は患者の健康よりも、企業や病院の収益が優先されるなどお金の問題なのです。

あなたに伝えたい

情報を開示することは次の事故を防ぎ、家族の心の救いにもつながる。



写真・隈崎稔樹

専門家に任せダメ 健全な不信感を

かつら・ひさし 1961年、大阪府出身。京都教育大理学部天文学研究科を卒業し、大阪府立高校の理科教諭になる。90年に大阪府の枚方市市民病院で出生した長女が亡くなり、枚方市を提訴。裁判の過程でカルテの改ざんや不必要な陣痛促進剤の投与などが判明。二審で逆転勝訴し確定。高校教諭を務めながら医療情報の公開・開示

医療消費者である市民の視点で医療行政をチェックしていく必要があります。

長女を医療事故で亡くした。一九九〇年十二月十二日、星子は生後九日で亡くなりました。妻が不必要な陣痛促進剤を知らない間に打たれた医療事故です。病院で妻は陣痛が異常だと訴えたのに「しゃべれるからまだまだ陣痛が弱い」とさらさら陣痛促進剤を打たれ、仮死状態で生まれま

した。調べると、陣痛促進剤により子宮破裂や赤ちゃんの重度の脳性まひなどが相次いだため、産婦人科医の団体が薬の添付文書に書かれている最大使用量の半分以下にすべきだと十五年以上前から産科医に警告していましたが、しかし妊婦や助産師には知らされておらず、添付文書は九二年まで改訂されませんでした。裁判で、妻が言っていることは事実で、星子は死ぬ必要がなかったんや、と証

明したかった。被害を繰り返さないことが子どもからの宿願だと思い、闘うことに迷いはなかったけれど、高校教諭を続けられるか悩みました。寝られずに、家の天井を眺めながら考えているときにふと、もし子どもが生きていたら育児をした時間があるやん、と気づいた。お風呂に入れる授業参観に行く、そついう育児にかけていたはずの時間で市民運動や裁判をやろうと気持ちを整理したら、漠然とした不安が消えました。薬害エイズなどにもかかわるよ。

僕を裁判を担当した石川寛俊弁護士は、当時薬害エイズ訴訟の弁護団のメンバーでもあり、弁護士会の研修会で薬害エイズ被害者の花井十五さんと意見交換したり。被害に遭った血友病の人たちは若いころから病気を抱えていたからか、みんな優しくて、面白い。オタク話が多くて、ぼくも漫画や映画が好きだったから、喫茶店やファミレスで学生のようにしゃべっていることも楽しかった。でも、彼らはほとんど亡

か、その都度議論すべきです。コロナも、社会がこの病気に対応していくために必要なデータは何か、行政がきちんと機能しているか市民がチェックするためにどの情報をマスコミに開示する必要があるのか。今考えるべきです。

勝村 久司 「医療情報の公開・開示を求める市民の会」代表世話人

調べると、陣痛促進剤により子宮破裂や赤ちゃんの重度の脳性まひなどが相次いだため、産婦人科医の団体が薬の添付文書に書かれている最大使用量の半分以下にすべきだと十五年以上前から産科医に警告していましたが、しかし妊婦や助産師には知らされておらず、添付文書は九二年まで改訂されませんでした。裁判で、妻が言っていることは事実で、星子は死ぬ必要がなかったんや、と証

明したかった。被害を繰り返さないことが子どもからの宿願だと思い、闘うことに迷いはなかったけれど、高校教諭を続けられるか悩みました。寝られずに、家の天井を眺めながら考えているときにふと、もし子どもが生きていたら育児をした時間があるやん、と気づいた。お風呂に入れる授業参観に行く、そついう育児にかけていたはずの時間で市民運動や裁判をやろうと気持ちを整理したら、漠然とした不安が消えました。薬害エイズなどにもかかわるよ。

僕を裁判を担当した石川寛俊弁護士は、当時薬害エイズ訴訟の弁護団のメンバーでもあり、弁護士会の研修会で薬害エイズ被害者の花井十五さんと意見交換したり。被害に遭った血友病の人たちは若いころから病気を抱えていたからか、みんな優しくて、面白い。オタク話が多くて、ぼくも漫画や映画が好きだったから、喫茶店やファミレスで学生のようにしゃべっていることも楽しかった。でも、彼らはほとんど亡

「ぼくの『星の王子さま』を読んだのは記者二年目、三重県で裁判を担当していたとき。それから何度か引越したから、ずっと手放さなかった。コロナを機に十五年越しに著者に会えたのは、しんどいコロナ取材を頑張った褒美に思えた。取材の帰り道、一緒に見上げた夜空には、夏の三角と土星、木星がく

つきり見えた。惑星と恒星の違いや星の瞬きについて勝村さんのプチ授業を聞きながら、あふれるコロナ情報におぼれそうになったら、コロナできれいになった星を眺めようと思った。大事なことを見落とさぬように。王子さまが教えられたように「かんじんなことは、目には見えぬ」から。



情報公開にも力を入れています。



薬害から学ぶことは。被害に遭った人の相談では「どの弁護士に任せたらいいですか」次のお産ほどの病院なら大丈夫ですか」と聞く人も少なくないけれど、任せしてしまわず、自分も一緒に考えなアカンよ」と答えました。意見を聞いた上で自分で判断すべきだ、と。一番一生懸命考えているのは当事者やから、自分に自信を持たなアカン。元に戻れない被害を受けた者にできることは、同じことを繰り返さないようにすることだけ。社会を変える活動も同じ。専門家に任せしてしまわず、切実な思いを持った当事者である市民が判断していかないといい。それが民主主義ではないですか。



市民の側は、与えられる情報だけをのみにしてたらアカンと思う。いやな感じやけど、不信感みたいなものがないといけないと思います。学校で一番大事なのは批判精神を養うことなんです。高等学校の教育目標について書かれた学校教育法五一条に「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」とある。おかしいと思っても、当たり障りないことしか言わないような大人に育てたらためなんです。



僕は青春時代に忌野清志郎にほれこんだ。ちょっとくらい、ロックンロールしなアカン。そう思います。

インタビューを終えて

取り上げられたように「かんじんなことは、目には見えぬ」から。